



TITLE:

(随想)欧州ウロウロ記

AUTHOR(S):

田村, 一

CITATION:

田村, 一. (随想)欧州ウロウロ記. 泌尿器科紀要 1957, 3(10): 601-602

ISSUE DATE:

1957-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111524>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 3 巻 第 10 号

昭和 32 年 10 月

随 想

欧 洲 ウ ロ ウ ロ 記

慶応大学教授 田 村 一

丁度 2 年前の 8 月末に羽田空港を飛び立つて歐洲の各地を視察したので、当時の泌尿器科の状況を書いてみたい。とにかく 2 箇月余の短かい間に飛び廻って歩いたこととて、極めて皮相の觀察に過ぎなかつたことを予め御諒承願いたいと思う。

Italy では Roma 大学の泌尿器科を訪れた。9 月の上旬であつたから Mingazzini 老教授はカプリ島に避暑に行つて居るとのこととて、若い Arduini 教授に逢つた。教授は 6 尺豊かな立派な体軀で年齢は 40 歳そこそこである。教室員をつれて病室、手術室、研究室、講堂等を案内してくれた。病室は 1 階は男の患者、2 階は女の患者を収容しベット数は 46 とのことである。前立腺肥大症、膀胱腫瘍、結石が多く、結核も少数入つていた。3 階は教授室、検査室、手術室でレントゲンは Young のレントゲンテーブルを使用していた。地下は研究室で Mingazzini 教授考案の人工腎臓の器械が一室を占めていた。

Swiss では Zürich の Kantons Spital と Basel の Bürger Spital を視察したが、いづれも泌尿器科は外科に属していた。しかし Zürich の Prof. Brunner のもとで専ら泌尿器科を担当している Dr. Rohrer が案内して呉れたところによると興味ある症例も可成入っているし、施設も仲々よく備つている。

独逸では München, Hamburg, Düsseldorf, Bonn 等の大学を訪れた。依然として独逸では泌尿器科患者を外科で扱っているところが多く、恐らく現在でも泌尿器科が独立して教授を置いているところは München と Hamburg ぐらいなものだろう。しかし外科の主任教授も泌尿器科は独立さすべきだとの意見を洩らしていたので、独立の気運は醸成されて来て居る様に思う。

München の Thalkirchnerstrasse にある泌尿器科を訪れたのは 9 月上旬で、まだ休暇中であつたが、幸に Prof. May が出勤していたので快く逢つて呉れた。50 歳近い長身瘦形無髯の紳士である。ここは病床 75 であるが、他に猶 100 床あるとのこととて、いろいろ治療上の話を聞いた後で、検査室、レントゲン施設、手術室、研究室及病室を案内して呉れた。May 教授は結核に興味をもっている由で、その患者も案外に多かつた。金属カテーテル、膀胱鏡共に尿道の損傷を避けるために真直なものを使用し、いづれも煮沸消毒を行つていた。同じ建物に皮膚科の Prof. Marchionini が居たので逢うことが出来た。

Hamburg, Düsseldorf, Bonn はいづれも外科で扱っているので特に述べることもなかった。Düsseldorf では Prof. Boeminghaus が旅行中で逢えなかつたのは残念であつたが、Medizinische Akademie で外科の Prof. Derra を訪ね泌尿器科主任の Prof. Dettmar に逢つて前立腺剔除術、尿道下裂症の手術を観ることが出来た。

瑞典では Stockholm の Karollinska 大学と Söder 病院を観た。Karollinska 大学では Prof. Hellström をたづねたところが、廻診するところであつたので一緒について廻つた。先づレ線写真を陳列した大きな二部屋で各受持から説明をきき、それに助教授、講師連がいろいろ意見を陳べるのを教授はうなづきながら訊いていた。教授は殆んど発言しなかつた。それから病室を廻り出したのである。私は Giertz 講師（明年 Stockholm に開催される第11回国際泌尿器科学会で宿題“Le diagnostic de la vessie neurologique”を担当することになつている）の前立腺全剝の手術が始まるとのことであつたからそれを見学した。Karollinska 大学病院も、南病院も病床2,000に近い実に堂々たる、しかも整備したものである。

仏蘭西では Paris の Hopital Necker, Hopital Cochin, Hopital Lariboisiere を観たが、泌尿器科誕生の地ともいふべき Clinique de Guyon のある Hopital Necker は昔日の活気なく、現在では Prof. Fey 及 Küss 助教授の出勤している Hopital Cochin が最も整備している。特にここでは Pavillon Albarran の豪壮な建築が完成近かつた。Prof. Fey に逢つたが病中とのことで Küss 助教授の案内で手術室、レ線室、研究室等を観たが建築が完成したら立派なものになるだろう。

英国では先づ London の Henrietta Street にある the Institute of Urology を訪ね所長の Dr. Higham に逢つた。地上3階地下1階の余り大きくない建物であるが University of London に所属して専ら大学卒業後の専門教育をする施設を備えている。そのすぐ前に泌尿器科病院として最古（創立1860年）の有名な St. Peter's Hospital がある。病床40床で、いたるところに長い歴史を物語る匂のする病院である。その他に泌尿器科病院（大学所属）としては St. Paul's Hospital, St. Philip's Hospital とがある。St. Paul's Hospital は病床49であるが、研究室が10室ほどあつて、研究設備も近代的に整備されていた。その外に London では Middlesex Hospital で Prof. Riches に逢い、腎臓手術を観たし、Urethritis nongonorrhoea の著者 Dr. Harkness（65歳の停年で教職を退き診療所を開いている）を Wimpole Street にたづね、又 Lister Institute of Preventive Medicine に欧州で P.P.L.O の第一人者と称される Klienberger 女史を訪れた。